

「101歳、途上国支援をフェア・トレードで」 コーヒー豆輸入卸小売業 安藤久蔵

NHKラジオ 明日へのことば
2012年7月18日 4時～

日本以外にも世界各地に遠征した。
55歳でキリマンジャロ100日間遠征。

50歳から85歳まで山を歩くことが人生の中心だった。
現在も若い人たち20～30人と東京近郊の山を歩く。若い人は前向きで良い。

春の花見には善福寺公園に知り合い約300人をお呼びしている。



珈琲豆卸店アロマフレッシュ

<http://taizen3.web.fc2.com/aromafresh.html>

お店は6時までの、土曜日の午後は多くの人が集まります。

定休日・月曜日、営業時間12:00～7:00
(配達のために時々閉まっていることがあります)

TEL03-3395-1854

杉並区善福寺1-3



安藤さんは、キリマンジャロに登った際、ポーターとして雇ったマサイ族の人たちと親しくなり、帰国後も交流を続けました。あるとき、マサイ族の人たちから「自分たちはコーヒー豆を作っているのだが、日本で売ってくれないか」と持ちかけられました。市場を通じた輸入ルートでは中間業者がもうかるだけで、彼らの生活は向上しないことが分かり、安藤さんは「組織を作りなさい」と助言しました。その後、世界のコーヒー生産者が連帯して市場取引に対抗する独自の取引ネットワーク「オスパール(連帯)」が発足しました。

こうした動きに呼応する形で安藤さんは85歳のとき、コーヒー豆の輸入卸・小売業を始めました。輸入は、発展途上国の作物を適正な価格で輸入することで生産者の賃金を保証する「フェアトレード方式」で行っています。以来16年、コーヒー業界は最高齢であるものの、今も自ら自転車ですぐの取引先にコーヒー豆を届けるなど、現役として活躍を続けている。
→現在101歳でコーヒー輸入販売店経営と現役登山家！

ある日、コーヒーショップに数人のニートの人たちが来た。そこで安藤さんは彼らを褒めてあげた。「遊んで、食べていけるなんと素晴らしい！ 自分も生まれ変わったら、あなた方みたいになりたいな？……」

どうして、働かないのかを聞いてみたら、かつては働いていたんだけど、人間関係がうまくいわず会社を辞めた……と言っていた。自分より若い上司に厳しい言葉で命令されたりして働くのがいやになったそうだ。」その後、そのニートの子の母親が店に来て、「うちの子に働け！ と言ってくれたのですか？」と聞いた。「実はうちの子が働き始めたのです…とのこと。」私は母親に答えました。「働け！ などと一度も言ったことはありません。働かなくて食べていけるのはいいね！ あやかりたい！ と褒めてあげたが……」

多分、100歳を越えた私の働く後姿を見て、働こう…と思ったのでは？
初めての給料は全額、母親にお小遣い…と言ってくれたの！ ……と母親は言っていました。

後日、その子が店に来た時、聞きました。お母さんにお小遣いとして全額、上げたときのあなたの気持は、どんな様子だった？
と聞いたところ、「気持ちよかった！」の返事であった。

「人の為にしてあげると、気持ちいいんだよ！」と二人で話し合った。

